



松やに採取
松やにから飛行機の燃料を作るため、国は松やにをとることを推奨、子どもたちなどが採取する作業にあたりました。



金物供出
武器などの材料にするため、企業や家庭から鉄や銅、青銅製品などを集め、国に供出しました。



増産教育
食料不足を解消するため、学校の授業の一環で、土地の開墾や農産物を作るようになりました。



防空演習
空襲による火災を想定し、水が入ったバケツを運ぶ訓練が町内会などの単位で行われていました。

戦時中の市内の様子
(恵那市所蔵)

平和とは —それぞれの思い—

終戦から80年以上が過ぎ、戦争を経験した人々の声を直接聞く機会が少なくなり、日本では争いのない日常が当たり前になっています。

一方、世界では今なお争いが起こっています。平和な毎日は、決して当たり前のものではありません。今月号では、平和の大切さを改めて考え、次の世代へつないでいくため、戦時中の様子や平和への思いを特集します。

問 社会福祉課 ☎ 26-2117



戦争の記憶と平和への願い —体験者の声—

平和のありがたさ

95歳 男性

戦争当時、私は中学生でした。1年生の頃は、かろうじて授業がありました。戦争が激しくなるにつれ、父親などが戦争に行き、男手がない家庭の農業を手伝いに行くなど、次第に授業日が少なくなっていました。3年生になると学徒動員といって、労働力不足を補うため、子どもたちが軍需工場などに動員されるようになります。私も瑞浪市の工場で働くようになりました。戦争中、落ち着いて勉強する時間はほとんどありませんでした。当時は、誰もが戦争に大きく影響を受け、自分のやりたいことなどできない時代でした。しかし、今は違います。やりたいことは自分次第でできる時代です。現代を生きる皆さんには、平和のありがたさを知り、いつまでも守り続けてほしいです。

忘れられない戦争の記憶

97歳 女性

昭和19年の春、岩村町の実科女学校に通っていた私は、学徒動員で、各務原にある飛行機を作る工場へ泊まり込みで働きに行きました。友達と一緒にだったので寂しくなかったのですが、朝から晩まで働く日々でした。各務原では、空襲を知らせるサイレンが鳴るたびに、防空壕へ逃げ込みました。夜、空襲で名古屋方面の空が真っ赤になるところを見ては、次は自分たちのところかもしれないと恐怖におびえたことを今でも覚えています。終戦を知った時は、心から安心しました。



高校生世代の思い



修学旅行で沖縄を訪れる恵那高生

恵那高等学校では平和学習の一環として、修学旅行でひめゆり平和祈念資料館や糸数アブチラガマ（太平洋戦争時に陸軍病院の分室となった自然洞くつ）などを訪問し、平和への学びを深めました。

この暮らしは当たり前じゃない

私が印象に残っているのは、ひめゆり平和祈念資料館です。私と同年代の子たちが看護師として戦争に参加していたことに衝撃を受けました。同時に今の私たちの暮らしがどれほど恵まれているかということ、それは決して当たり前じゃないことに気付かされました。そして、この暮らしが続くためには、私たち世代が平和の大切さを理解し、引き継いでいかなければいけないと思いました。



石塚優里彩さん（2年生）

今の私にできること

糸数アブチラガマの中は、暗くて怖かったです。戦争中、このガマでは若い女学生たちがひめゆり学徒隊として働いていたと聞きました。夢や未来と引き換えに、当時を懸命に生きたひめゆり学徒隊のことを思うと、私たちは平和な時代に生き、夢や目標に向かって努力できることの尊さを改めて感じます。そのありがたさを忘れず、目標に向かって頑張りたいと思いました。



早川心菜さん（2年生）



慰霊碑（大井町）

慰霊碑などは市内各所にあり、各地域の遺族会などで維持管理されています。



戦後八十周年恵那市戦没者追悼式（昨年11月開催）

太平洋戦争での戦没者を慰霊し、平和を祈念するため、市戦没者遺族連合会が開催。市内では10年ごとに挙行されています。

黙とうにご協力ください

防災行政無線からサイレンが流れます。

- ・8月6日(木)午前8時15分「広島市 原爆被災の日」
- ・8月9日(日)午前11時2分「長崎市 原爆被災の日」
- ・8月15日(土)正午「戦没者を追悼し平和を願う日」

—それぞれの思い—

遺族会の思い

遺族の立場から
平和を伝え続けていく

私の兄は戦時中、満州に出征していました。終戦で恵那に戻ってきましたが、戦地でかかった病気が原因で、帰ってきて、1週間で亡くなりました。以来、親が戦没者遺族会に入り、親が亡くなった今は、私が引き継いでいます。

遺族会は市内13地域に1団体ずつあり、それが集まり、恵那市戦没者遺族連合会となっています。戦争で亡くなった方々を追悼する慰霊祭の開催や、慰霊碑などの維持管理を行うことを通して、平和の大切さを地域に伝えてきました。

しかし、近年は会員の高齢化や後継者不足などにより、会員数が減少し、活動や組織運営の継続が難しくなっています。

こうした状況を踏まえ、これまで各遺族会で行っていた慰霊祭を、本年度から合同で実施することになりました。本年の合同の追悼式は10月に開催します。

日本では戦後80年が経ち、戦争のことが身近に感じられなくなってきました。しかし世界では、絶えず戦争が起こり、その争いで亡くなる方と遺族の方が、存在しています。私たち遺族が味わった悲しみを、この先繰り返すことがないよう、平和の大切さを次の世代へつないでいきたいです。

遺族会や慰霊碑など、多くの方は聞きなれない言葉だと思いますが、この機会に戦争と平和について、考えてもらえればと思います。

※1 主に戦争で亡くなった方の遺族で構成される組織・団体
※2 戦争犠牲者の霊を弔い、戦争の歴史を後世に語り継ぎ平和を祈るために建てられた塔



市戦没者遺族連合会会長 西本任良さん（85歳）

大井町の戦没者遺族会と市戦没者遺族連合会の業務に尽力している。令和5年から同連合会会長を務める。

若い世代の思い



神原悠介さん（41歳）

自身が営むカフェで、「戦争を知らない子どもたちの集い」と題したイベントを開催。

戦争を知らない私たちに
できること

戦後から何十年も経った現在では、多くの人にとって戦争は歴史上の出来事で、どこか遠い存在になっています。しかしニュースでは、世界各地で起きている戦争のことが放送されています。

ある日、小学生の娘から「なんで、戦争って起こるの？」と聞かれました。私は、戦争はさまざまな要因が複雑に絡み合い起こるので一つの答えを導くのは難しいと思っています。

娘には「お父さんも分からないんだよ。一緒に考えよう」と伝えました。

この出来事があり、戦争について話し合うイベントを企画し、参加者で話し合ってみました。そこで、何か明確な答えが出たわけではありません。でも「戦争」を他人事として捉えるのではなく、一人一人が目を向けて、考えていくことが大切なのではないかと思っています。